

『茶の当面の栽培管理について』

令和4. 1. 19 美馬農業支援センター

1. 栽培上の問題点

「茶工場への持ち込み葉のばらつきによる品質低下」

- 対応策
- ・適期収穫
 - ・摘採方法
 - ・選別出荷
 - ・春肥の施用
 - ・春整枝の実施

2. 春肥・芽出肥の施用

(1) 春肥

- ◇春肥は、新芽の生育に必要な肥料を施与するもので、一番茶の生育や品質に影響する。
- ◇気温が10℃以上となる3月上旬から窒素成分で10aあたり16kgを目安に、できるだけ2回に分けて施肥する。

(2) 芽出肥

- ◇一番茶の芽出しの促進のための追肥として、4月上旬に硫安などの即効性肥料を施用する。

3. 春整枝・化粧ならし

- ◇摘採面を均一にし、機械摘みの際に、古葉や小枝が混入しないように、浅く整枝する。秋整枝（株ならし）を行っていない場合は、必ず春整枝を行う。

4. 一番茶の摘採

(1) 摘採適期について

- ◇手摘みの場合一般に出開度30～60%、はさみ摘みの場合50～80%が基準。
- ◇品質に考慮し、なるべく「ミル芽摘み」に努める。
ミル：静岡の方言で「柔らかい」の意
- ◇機械摘みの場合は古葉が混入しないように、摘採面を確認し、ていねいに摘む。
- ◇すべての葉が開き終わって芽が止まることを「出開き」といい、これ以降は全窒

素やアミノ酸含有量が減少し繊維の量が増えて硬くなっていくため、摘採の時期と位置が生葉の品質に大きく影響する。

- ◇茶の芽に含まれるアミノ酸含有量は、葉の位置によって大きく異なり、出開芽が若い時に刈ると品質が良く高いお茶となる。

未開葉芽と出開芽



部位別アミノ酸含有量



(2) 生葉の管理について

- ◇生葉は、できるだけ摘採当日の新鮮なうちに製造する。
- ◇摘採後に袋詰めした生葉を日なたに放置すると葉が酸化して品質低下につながる。摘採した生葉は日陰に置き、速やかに茶工場へ搬送する。

5. 一番茶摘採後の管理

(1) 整枝について

- ◇一番茶後の整枝の目的
一番茶後の整枝は、遅れ芽を処理し、芽揃いを良くし、均一な二番茶をつくるために行う（遅れ芽の混入を防ぐ）。
- ◇整枝のタイミングが重要
立地条件や気温で遅れ芽の伸び方が違う。整枝のタイミングは、一般的には一番茶摘採から7～10日後くらい（遅れ芽が出揃った頃）といわれる。
(整枝の深さは一番茶摘採の位置よりも深くないように注意すること。)

・樹勢が強い茶園

- ◇二番茶・三番茶の芽揃いを良くするため、整枝を行う。
- ◇整枝は必ず行わないと、二番茶に古葉や茎が混ざり品質が悪くなる。
- ◇適期摘採の場合は7日位後、ミル芽摘採は10日位後。

一番茶後の整枝



・樹勢が弱っている園

- ◇毎年摘採を繰り返すと枝が細く密生し、小葉となり開葉数が少ない芽となる。摘採によって芽の数が1.5倍くらい増え、収穫のたびに枝が細くなる度合いが激しくなり、良い芽が取れなくなる。
- ◇こうした茶園では、更新（せん枝）を行い、樹勢の回復を行う。

更新の種類	剪枝位置	効果の持続期間
浅刈り	摘採面から 3～4cmの深さ	2～3年
深刈り	摘採面から15～20cm //	5～6年
中切り	地上30～50cm	10年程度
台切り	地際あるいは地上15cm以内	15～20年

※台切りは強度の処理であるため樹形が整うまでに時間を要する。
寒害等の事後処理で行う場合を除いて、台切りを行うよりも改植の方が望ましい。

- ◇細い枝を確認したら、その分かれている部分の手前(根元)で切って、太い枝から丈夫な芽を出して太い枝を作る。
- ◇更新時期は、一番茶摘採後なるべく早いほうが良い（遅くとも15日以内）
(秋までの時間が確保されるほど樹勢が回復しやすい。)

◇更新茶園の整枝

更新した茶園は、更新後10～15日くらいで再生芽が出てくる。
この芽が5～6葉開葉したら、再生芽の整枝を行う。

- ・浅刈り(約40日くらい)：やや遅れて二番茶が摘採できる
 - ・深刈り(約50～60日)：7月上旬頃軽く整枝する
 - ・中切り：7月中下旬に再生芽が15cm程度伸びた頃(せん枝後約60～70日)中切り面より5cm上で新葉を2～3枚残して整枝する。
- ※山間地等で中切り後の回復が遅れ、7月中に再生芽が十分伸びてこない場合はこの時期での整枝は行わず、秋または春に整枝したほうが良い。

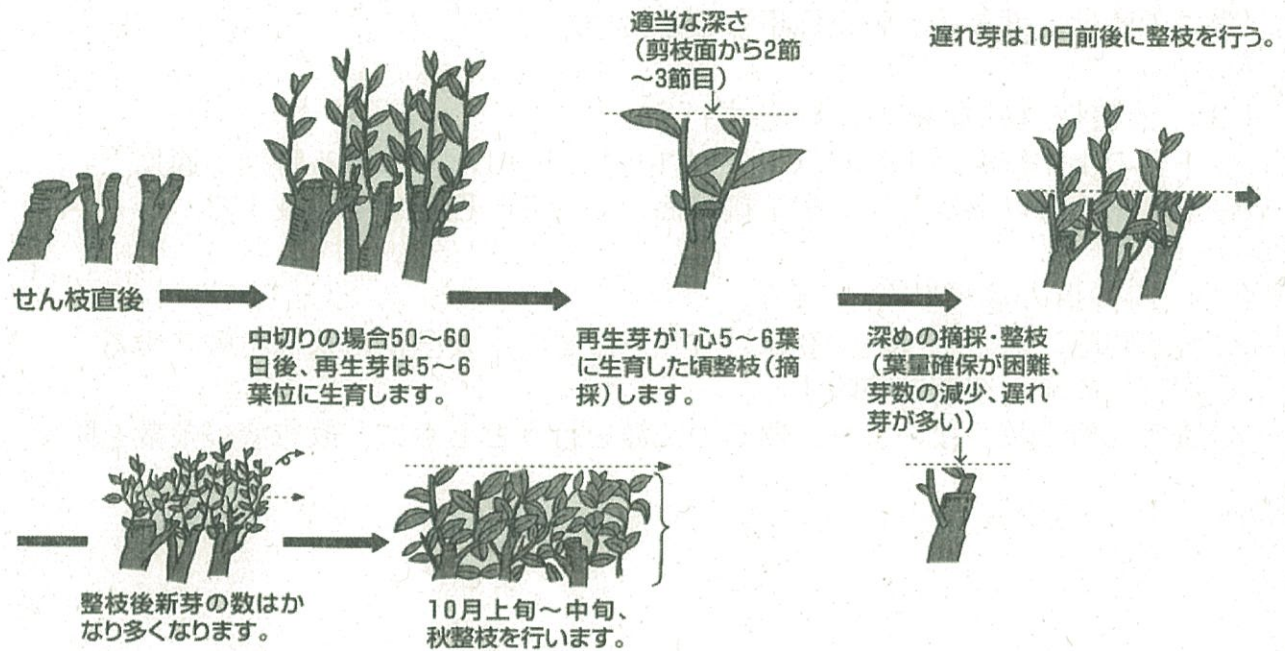


図1 中切り更新後の芽の生育と整枝方法

(2) 施肥

◇追肥(お礼肥え)を施す。

表1 一番茶後の施肥量(10a当たり)

肥料の種類	成分kg
硫安 (21-0-0)	窒素 1 0
硫酸加里 (0-0-50)	カリ 1 2

6. その他

(1) 年間の施肥は施用基準を守り、適正に行う。

◇窒素は年4～5回に分けて施し、溶脱等を極力なくす。

◇リン酸、カリは溶脱が少ないため、春秋の2回に分けて施す。

◇鶏糞などの有機質肥料を有効利用する。

表2 施肥基準(10a当たり k g)

肥料と時期	窒素 (N)	リン酸 (P ₂ O ₅)	カリ (K ₂ O)
元肥 (9月上旬)	15	15	8
春肥 (3月上中旬)	16	10	12
芽出肥 (4月上旬)	8		
夏肥 (5月中下旬)	10		12

(2) 土壌改良と深耕

- ◇土壌改良と深耕は、8月中旬～9月上旬頃に行う。
- ◇茶園土壌における適正pHは4～5であり、4以下の場合は苦土石灰で矯正する。
- ◇深耕することで、土壌の通気性、透水性を良好にして根群の旺盛な生育を促す。
- ◇この時期、堆きゅう肥を施用すると良い。

(3) 秋整枝 (株ならし) を必ず行う。

- ◇1日の平均気温が18℃以下(10月中旬～下旬以降)になる時期が適期。
- ◇葉層を8cm以上残し、二番茶摘採面の4～5cm程度上で整枝する。

(4) 病虫害の適期防除を行う。

- ◇農薬防除に際しては農薬登録の有無を確認し、安全使用基準を厳守する。
- ◇病虫害の発生初期に防除する。
- ◇農薬残留事故がないよう、器具の洗浄を行うとともに、散布液の飛散を防ぐ。

★重点防除病害虫

＜チャトゲコナジラミ＞

□2004年に京都府の茶園で発見された侵入害虫、2011～12年に静岡県で多発し、全国に拡大、徳島県では、2013年に発生が確認された。

美馬管内では、2018年に美馬市脇町、2020年に美馬市美馬町で確認

□分 布：東アジアの熱帯から温帯

□寄宿植物：ツバキ科植物（チャ・ヤブツバキ・サザンカ・サカキ・シキミ）

□主な特徴：成虫 約1.1～1.3mm、幼虫 約0.2～1.3mm、卵 約0.2mm

春期の成虫発生は、一番茶新芽生育期とほぼ一致

成虫は新芽で交尾し、葉裏に産卵（1雌平均26個）

孵化した幼虫は、葉裏に固着寄生し、すす病を誘発する甘露を肛門から排出

卵や1～2齢幼虫で越冬し、春は3～4齢幼虫となる3～4齢幼虫は農薬が効きにくい。



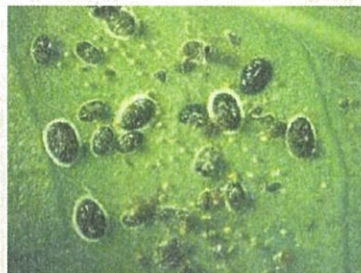
卵（約0.2mm）



1 齢幼虫



4 齢幼虫（約1.2mm）



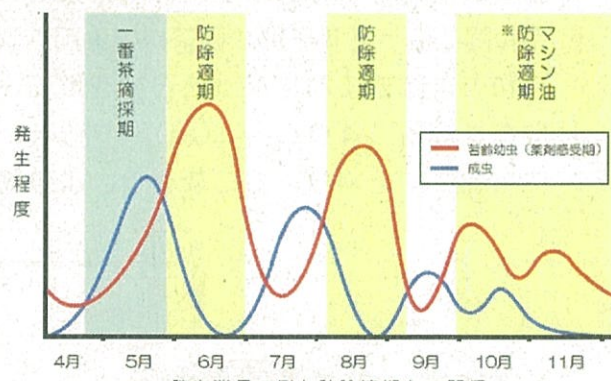
夏秋期には各齢幼虫が混在



雌成虫（約1.3mm）



すす病が発生した茶園



□物理的防除

1. すそ刈り

下端に多く寄生するため、すそ刈りを行い、刈葉は、焼却・埋設する。

2. せん枝

葉のみに寄生するので、一番茶摘採後に、せん枝し、せん定枝は焼却・埋設

□薬剤防除

・マシン油乳剤

秋整枝後（10～11月）又は初春（1～3月）にマシン油乳剤を散布

・適用薬剤（アプロードエースフロアブル、コテツフロアブル等）

6月中旬、8月下旬に適用薬剤を散布

- ・すそ重点散布：すそ部から上部に向けて斜め上方に薬剤を散布
- ・できるだけ、天敵のハチ（シルベストリコバチ）に影響の少ない薬剤（アプロードエースフロアブル）を散布する。

○アタックオイル（マシン油乳剤）

- ・使用時期：10月～3月、希釈倍率：50～100倍、使用液量：200～400L/10a
- ・使用時期：4月～9月、希釈倍率100倍、使用液量：200～400L/10a

○アプロードエースフロアブル

- ・使用時期：摘採14日前まで、希釈倍率：1,000倍、使用液量：200～400L/10a
総使用回数：2回以内

○コテツフロアブル

- ・使用時期：摘採7日前まで、希釈倍率：2,000倍、使用液量：200～400L/10a
総使用回数：2回以内

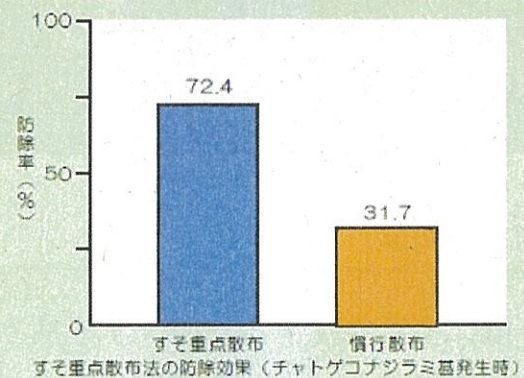
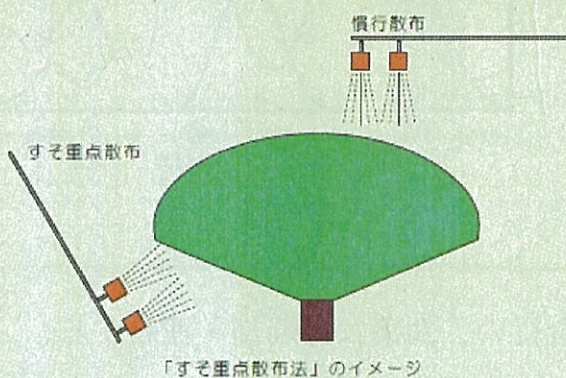
○ダニゲッターフロアブル

- ・使用時期：摘採7日前まで、希釈倍率：2,000倍、使用液量：200～400L/10a
総使用回数：1回

寄生密度が高い部位に効果的な「すそ重点散布法」

すそ部から茶株頂上部へ向けて斜め上方に薬液を散布することで、寄生の多いすそ葉の葉裏へ薬剤がかけやすくなり防除効果が向上します

- ◆ ドリフト防止タイプ2頭口などの噴口を使用する
- ◆ 動噴の圧力をすそ部から茶株中央頂上部まで散布薬液が届く程度に調整する
- ◆ うね間に沿ってすそ部から茶株中央部へ吹き上げるように薬液を散布する（半うね分）
- ◆ うねの末端までおこなったら竿を反転させ、反対側の半うねに薬液を散布する
- ◆ 散布薬液量は400L/10a、歩行スピードで調整する
- ◆ 散布前にすそ刈りをおこなうと、より効果的



J A 美馬 口山製茶工場 より

摘採時の注意事項

- ・ 機械摘みの場合

一番茶では 10 c m 前後で摘採する (1 芯あたり 4~5 枚程度)

- ・ はさみ摘みの場合

刃先をやや上向きにしてはさみを使うようにする。

- ・ 生葉摘み取り後の選別作業を行って下さい。

(特に在来種については古葉・古枝が混入しやすいので注意)

- ・ 選別時に古葉・異物がないかを注意して選別作業をして下さい。

(古葉・・・昨年の葉 (色の濃い緑色の葉)、固くなった茎 (茶色になっている茎))

(異物・・・石、ペットボトル等)

機械摘みの場合は茶摘み機の部品 (ネジやナット等) が混入していることがあったので茶摘み前と後に点検を行ってください。

- ・ 茶期後期になるにつれて生葉がたけてきて生葉自体の水分が少なくなると加工段階で乾燥しすぎて砕けた茶葉又は、粉茶になるの割合が多くなり歩留率が悪くなるので早めの摘み取りをし生葉自体の水分がある状態で持込してもらいたい事。

・土、日は摘み取り作業が集中しやすいので平日の摘み取りが可能な場合は出来る限り平日に行ってほしい事。

・摘採後は出来るだけ早く工場への持込をして下さい又、摘採後すぐに工場に持込出来ない場合はシート等に広げて風通しの良い日陰で保管して下さい。

理由・・・生葉は摘採した段階で発酵が進み始めて生葉が熱を持ち生葉焼けを起こす為。

・お茶最盛期については当工場の1日の処理数量を大きく超えてしまう場合には一時受け入れを停止する可能性があるかもしれない事。

(防災無線などを利用し周知するなど)